

藤塚鄰の朴齊家研究 ハーバード・燕京図書館の 藤塚コレクション資料を中心に

その他のタイトル	Fujitsuka Chikashi 's Studies on Park Jega Focusing on the Fujitsuka Chikashi Collection in the Harvard Yenching Library
著者	李 曉辰
雑誌名	文化交渉 : Journal of the Graduate School of East Asian Cultures : 東アジア文化研究科院生論 集
巻	3
ページ	239-252
発行年	2014-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/9917

藤塚隣の朴齊家研究

—ハーバード燕京図書館の藤塚コレクション資料を中心に

李 暁 辰

Fujitsuka Chikashi's Studies on Park Jega —Focusing on the Fujitsuka Chikashi Collection in the Harvard Yenching Library

Hyojin, LEE

Abstract

In this paper I will introduce Park Jega's books in the "Fujitsuka Chikashi Collection" housed in the Harvard Yenching Library.

Fujitsuka Chikashi (1879-1948), a professor of Chinese philosophy at Keijo Imperial University, started research on the interaction between Korean and Chinese scholars during the 18th to 19th centuries. He especially focused on the Joseon era Confucian scholar Kim Jeong-hui (1786-1856), on whom he wrote his PhD dissertation, while at Tokyo Imperial University. He collected many books and letters of Joseon Confucian scholars, and some of these are housed in the Harvard Yenching Library. These works are not so important to the study of Fujitsuka's own works, but are invaluable for the light they shed on academic interaction in East Asia during the 18th to 19th centuries.

This paper will focus on Park Jega's works in particular, and will also look at Fujitsuka's notes related to those works. After this I will make a comparison with Fujitsuka's own writings.

Key words: 藤塚隣、朴齊家、清朝文化東伝、燕行、ハーバード燕京図書館、
藤塚コレクション

はじめに

藤塚鄰（1879-1948）は、1926年から1940年まで京城帝国大学の支那哲学講座の教授として韓国に滞在し、18・19世紀における清朝と朝鮮の学者たちの交流と清朝文化東伝を研究した人物である。彼は、金正喜（1786-1856）を中心にすえながら、洪大容・李徳懋・朴齊家など燕京に行った朝鮮後期儒学者についても調査・研究し、「清朝文化東伝の研究」により東京帝国大学博士学位を取得した¹⁾。その過程で、書籍・書画・手紙などの資料を膨大に集め、18・19世紀における清朝文化が朝鮮に入流した様相と痕跡を実証的に究明した。

藤塚がそのような詳細な研究ができたのは、緻密な資料分析と考証にあった。「書痴」ともいわれた藤塚は、中国の琉璃廠や韓国の仁寺洞の書店にある関連資料をできるだけ多く渉獵していた。みずから「過去十年間、苦心惨憺、極力資料の蒐集を図り、その結果、書籍千余卷、尺牘書画拓本類千点に達した²⁾」と回顧するように、それは実に膨大な量であった。また、藤塚が熱心に蒐集し、所蔵していた資料には、のちに韓国国宝として指定された「歳寒図」のように貴重なものも多数占めていた。

この膨大な量の資料については、近年その具体的所蔵状況を確認することができるようになった。2006年1月、子の藤塚明直によって、藤塚所蔵資料1万4000余点が韓国の果川文化院に寄贈された³⁾。一方、ハーバード燕京図書館に散在していた藤塚蔵書の一部は鄭珉氏によって紹介され、『18세기 한중 지식인의 문예공화국－하버드 연칭도서관에서 만난 후지쓰카 컬렉션（18世紀韓中知識人の文芸共和国—ハーバード燕京図書館で出会った藤塚コレクション）』（ソウル：문학동네、2014年）にまとめられた。これらの資料によって、藤塚が行なった研究の全貌とその意義がさらに明らかになると思われる。

筆者は、2014年3月ハーバード燕京図書館において、藤塚コレクションの資料調査を行なった。本研究ノートでは、調査した資料の中でも、金正喜の師であった朴齊家の著書を紹介し、それらの資料が藤塚の研究にどのように使われていたかを検討する。また、藤塚が考証した部分や付記・挿入したメモなどを紹介しながら、藤塚の研究方法とその特徴について考えたい。

一、藤塚コレクション所蔵の朴齊家の著作

朴齊家（1750-1805、号は楚亭・修其・貞蕤・葦杭道人）は、朝鮮後期の学者であり、「北学

1) のち、子の明直によって編纂され、藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』（国書刊行会、1975年）として出版された。

2) 藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』、4頁。

3) 果川文化院編「후지쓰카 기증자료 목록집（藤塚寄贈資料目録集）I・II」（果川文化院、2009年）

派」⁴⁾の代表的人物である。彼は正祖・純祖時代（1776-1834）に燕京を使臣として四度訪ね、清朝の学者たちと広く交流した。朴齊家・李徳懋・柳得恭・李書九が書いた詩は柳琴（柳得恭の叔父）によって『巾衍集』⁵⁾にまとめられ、1776年に清人の李調元と潘庭筠が序と題評を書いた。これらのことから、彼らは清朝の学者たちに「四家」と呼ばれ、清国までその名を知らせた⁶⁾。藤塚が朴齊家の名を初めて知った契機も、乾隆・嘉慶間の学者陳鱣（1753-1817）の著書『簡莊文鈔』からであった。藤塚は次のように回想している。

わたくしは、すっかりこの琉璃廠に吸いこまれて、何百回通ったかわからないほどであった。……その折、偶ま目に触れたのは、乾・嘉間の学者陳鱣（字は仲魚）の著「簡莊文鈔」であった。その巻二の「貞蕤藁略鈔」といふ一文を読んでもみると、冒頭に次のやうなことが書かれてある。……かくて、陳は、朴修其の見識が高く、学問の優れてゐることを絶賛してゐる。わたくしは、この文を読んで始めて朴修其の存在を知ったのであるが、「朴修其とは、そも、何人であるか。」この疑問は、深く脳裡に刻まれて、しかも之を解決すべき機会を得なかつた。……大正十二年五月に帰朝、同十五年四月、城大に転任することになった。京城に着いて問もなく、偶ま翰南書林で目に触れた「四家詩」（別名巾衍集）なる書によって、図らずも年来の疑團が氷積した。四家とは、正祖朝に新興学人として謳はれた李徳懋・柳得恭・朴齊家・李書九のことで、「修其」は、即ち朴齊家の字であった。本書は、柳得恭の叔父柳琴の編したもので、彼は入燕の際之を携へて清儒に示し、李調元・潘庭筠の序、潘庭筠・李鼎元の批を得、忽ち北京詩壇の評判となつたものだった。……この一書によって喜びと感激を受けたので、急角度に朴齊家の研究へと邁進した。彼の「北学議」を始め・詩集・文集、さては清儒と往復の尺牘類に至るまで、夥しき資料を収むることができた。最後に朴齊家その人の肖像をさへ手に入るゝに至つた。⁷⁾

藤塚は、中国の琉璃廠で知つた朝鮮の「朴修其」という人物に関心を持ち、京城帝国大学の教員として朝鮮に赴任してから、やがて朴齊家の名を発見したのである。ソウルの翰南書林で『巾衍集』を手に入れ、「喜びと感激」を受けた藤塚は、朴を研究することを決心し、「詩集・文集、さては清儒と往復の尺牘類に至るまで、夥しき資料」を集めた。そして、彼の関心は朴の

4) 清朝の文物と技術を学び、実学的学問を通じて生活水準の向上と進展を企てる利用厚生・富国強兵の思想を重んじた学者たちを指す。「北学」は、朴齊家の著書『北学議』に由来するものである。「利用厚生学派」ともいう。

5) 『四家詩集』ともいう。

6) 朴齊家の生涯と思想については、金龍徳「貞蕤朴齊家 研究」（『論文集—中央大学』第五集、中央大学校、1961年）、金龍徳「貞蕤朴齊家 研究（第二部）」（『史学研究』第10号、韓国史学会、1961年）を参照されたい。

7) 藤塚鄰『日鮮清の文化交流』（中文館書店、1947年）、46-48頁。

弟子金正喜に移り、清朝文化交流史の執筆に挑んだのである。事実上、藤塚が朝鮮後期学者たちを研究するように導いたのは、朴齐家であるに違いない。

藤塚は、朴の遺著を次のように紹介している。

貞蕤稿略	一冊	写本・刊本
北学議	一冊	写本
貞蕤閣（初、二、三、四）集	四冊	写本
竟信堂夾袋	一冊	写本
貞蕤閣文集	二冊	写本 ⁸⁾

この中で、ハーバード燕京図書館の藤塚コレクションには、『北学議』（1冊）、『貞蕤稿略』（1冊）、『貞蕤閣集』（5冊、「竟信堂夾袋」を含む）、『縞紵集』（2冊）が所蔵されており、全部で四種九冊である。これらを藤塚の蔵書であったかどうかについてだが、主にハーバード燕京図書館の分類によれば、藤塚コレクションに所蔵されている書物の特徴として次の六点があげられるという。①黄色と赤色の二種類の題簽紙に藤塚の特有の筆体で表題が書かれている。②本文の中に、楔の形の符号を付したうえで欠字を書き入れ、誤字には朱点をつけ、その横に朱墨で正しい字を書き入れるといった独特な校正および修正表示がある。または、本文上段に参考のメモなどが書き入れられている。③原稿用紙や使った紙を四角に切り取って、本文と関連する情報を書いたメモ用紙が挟まれている。④書根にも筆で楷書体の書名を記した書根題がある。⑤本の帙や各巻の表紙の裏に、「日本出版貿易株式会社（Japan Publications Trading Co.Ltd）」のステッカーがしばしば貼られている。⑥書物が図書館に入庫した時期が1950年代に限定される、といったことである⁹⁾。もっとも確実に藤塚蔵書であると判断できるのは、題簽のや筆体の一致、藤塚のメモや書き入れの存在、また、稀ではあるが藤塚の蔵書印や号の「望漢廬」が見られるものである。

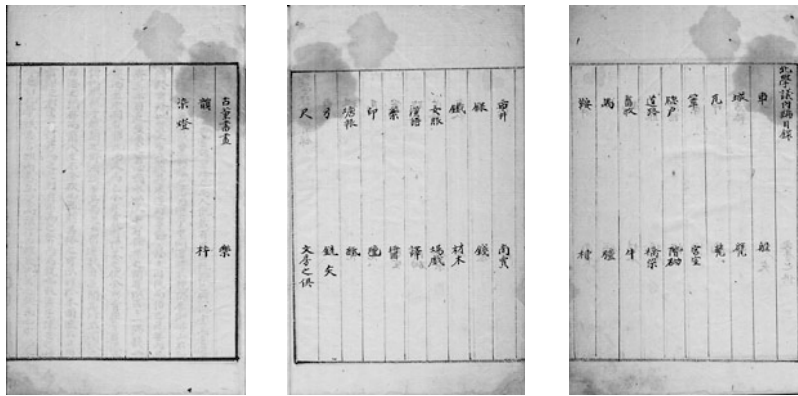
二、藤塚コレクション所蔵本『北学議』

- 『北学議』 1冊 写本 蔵書印なし 帙に黄色い題簽が貼られているが書名等は記されていない

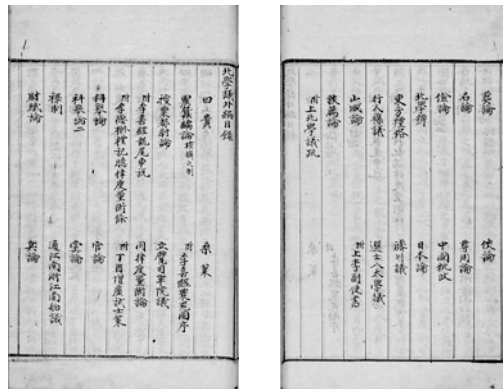
『北学議』は、1778年（正祖2年）朴が初めて燕京を訪問・視察した際、みずからの見解を披

8) 藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』、46頁。

9) 鄭珉『18세기 한중 지식인의 문예공화국—하버드 연칭도서관에서 만난 후지쓰카 컬렉션 (18世紀韓中知識人の文芸共和国—ハーバード燕京図書館で出会った藤塚コレクション)』（ソウル：문학동네、2014年）、667頁。



【資料1-1】藤塚コレクション蔵『北学議』内編目録



【資料1-2】藤塚コレクション蔵『北学議』外編目録

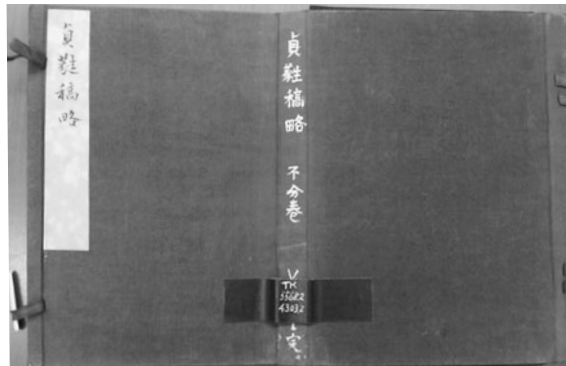
瀝したもので、内編・外編の二巻一冊で構成されている。この書物の題名から「北学論」や「北学派」という用語が生まれたことはよく知られている。「北学」とは、清の先進的文物と制度を称する用語で、孟子の言葉に由来している¹⁰⁾。写本で伝わり、1962年になってようやく朴の文集とともに『北学議』が出版された。藤塚コレクション蔵本も写本で、表紙には書名が書かれておらず、「北学議内編目録」から始まる。続いて、「序」（自序、署名は葦杭道人）、朴趾源（1737-1805）の「北学議序」、徐命膺（1724-1776）の「北学議序」が載せられている。本書巻末には、「辛巳十月 宗人兢性膳」と書かれており、後裔の朴兢性により浄書されたことは確認できるが、兢性がどのような人物であるかは不明である。表紙および本文に藤塚の書入れはなく、メモなどの挟み物もない。ハーバード図書館のホームページで全文ダウンロード可能である。

10) 『孟子』滕文公篇上に「吾聞用夏变夷者、未聞变於夷者也。陳良、楚産也。悦周公仲尼之道、北学於中国。方之学者、未能或之先也」という。

三、藤塚コレクション所蔵本『貞蕤稿略』

- 『貞蕤稿略』 1冊 清朝刊本 卷末に蔵書印二つあり 帙に黄色い題簽が貼られ「貞蕤稿略」と記す

『貞蕤稿略』は、朴齊家の詩文選集である。貞蕤は朴齊家の号である。朴齊家が使臣として中国を訪問した時、交友した人物たちが刊行に参加した。清の蔵書家として知られる吳省蘭（?-1810）が編集し、陳鱣（1753-1817）が校正して序文を書いた。吳省蘭は叢書「藝海珠塵」を編纂した際、陳鱣の序文とともに全文収録したが、さらに単行本や写本の形でも流通した。文と詩と分かれているので、別々の書物として筆写されることもあった。この版本は単行本であり、一冊に文と詩がまとまっている。封面（内表紙）には、隸書で「貞蕤稟略 簡莊題」と記され



【資料2-1】藤塚コレクション蔵『貞蕤稿略』の帙



【資料2-2】藤塚コレクション蔵『貞蕤稿略』の蔵書印

ているが、簡荘は陳鱣の号である。また巻末には蔵書印があり、「守一齋」の朱文方印が、下部に「自謂羲皇上人」の白文方印が押されている。

藤塚は、本書について『清朝文化東伝の研究』において以下のように述べている。

今次の行に於て、彼等は、新に陳鱣・錢東垣・黃丕烈・曹江・沈剛・張玉麒・王霽・彭薰支等と訂交した。朴齊家・柳得恭と、陳鱣・錢東垣とは、琉璃廠の五柳居で邂逅したのが縁で、互に親しく交はるに至った。陳鱣は朴齊家に、自著論語古論（乾隆六十年刊刻）を贈り、朴齊家は自著貞蕤稿略を出して、陳鱣の序を求めた。そこへ琉球の使から還って来たばかりの李鼎元も加はって、陳に勧めたので、陳は喜んで之に序し、其の古学を發明し、六芸に貫通せるを激賞して居る。陳は、友人の吳省蘭に其の刊刻を頼み、自ら校正の勞を執って、芸海珠塵の中に入れて貰ったばかりでなく、又特に単行巾箱本として自刻して遣った。其の交情の程が窺はれるではないか。此の巾箱本は、文と詩と二冊に分かれ、封面兒には、貞蕤稟略簡荘題とあり、陳序を載す。稀覯の書。余は朴趾源の孫朴珪寿旧蔵本を収む。清の徐康が、珠塵本の方を紹介して、「日本使臣朴齊家云々」と誤記した（前塵夢影録）のは滑稽である。邦人の著録に、此の書を載する甚だ稀であるが、独り西島蘭溪の慎夏漫筆卷四に見出し得たのは、真に空谷跫昔の感がする。恐らく珠塵本が流伝したのであらう。¹¹⁾

四、藤塚コレクション所蔵本『貞蕤閣集』

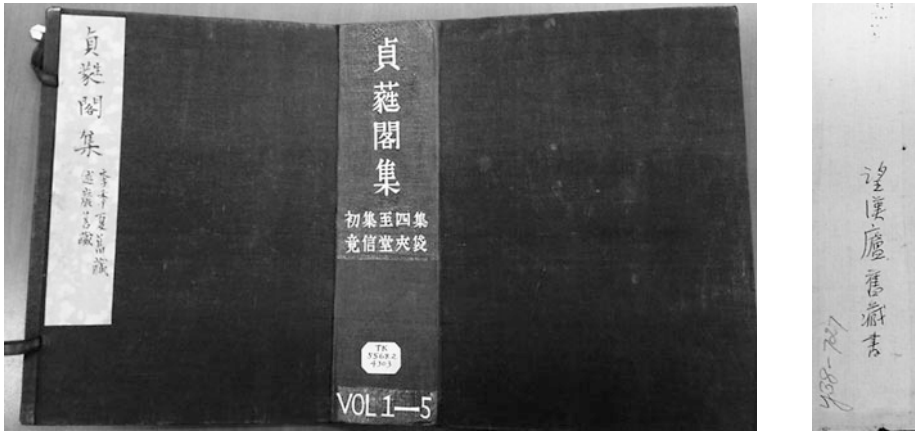
- 『貞蕤閣集』五卷五冊 写本 五冊目の内題は「竟信堂夾袋」各巻冒頭に蔵書印が二ヶ所、巻末下段に蔵書印が一ヶ所あり 帙の黄色い題簽が貼られ「貞蕤閣集 李季夏舊藏／述巖舊藏」と記す

これまで伝わっている『貞蕤閣集』の写本の中で、五卷五冊の完帙で残っているはこの藤塚コレクション本のみである¹²⁾。韓美鏡（2004）は、当コレクションの『貞蕤閣集』について、①各巻ごとに目次が載せられている、②書名の表記や、第五巻に見られる著者事項のなどの点が、他の写本と異なることを明らかにし、その価値が高いと評価した¹³⁾。帙の内側に「望漢廬旧蔵書」と記されていることから、藤塚の蔵書であったことが確認できる。また、帙の題簽も藤塚の筆跡であり、藤塚自筆のメモが四枚挟み込まれている。本文に書入れはない。ハーバード図書館のホームページで全文ダウンロード可能である。

11) 藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』42頁。46頁にも言及あり。

12) 韓美鏡「『貞蕤閣集』 시집에 대한 연구」(『書誌学研究』第29号、書誌学会、2004年)、90頁。

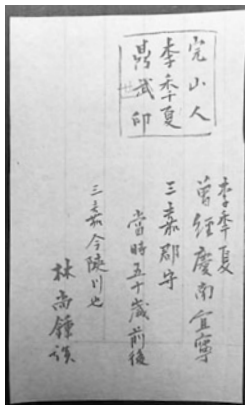
13) 韓美鏡「『貞蕤閣集』 시집에 대한 연구」、107-108頁。



【資料3-1】藤塚コレクション蔵『貞蕤閣集』の帙と内側の『望漢廬舊藏書』

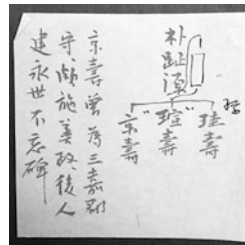


【資料3-2】藤塚コレクション蔵『貞蕤閣集』の蔵書印(左)と藤塚のメモ(右)

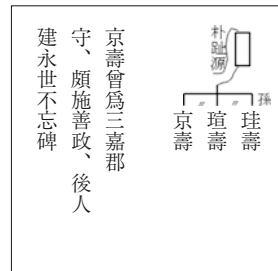


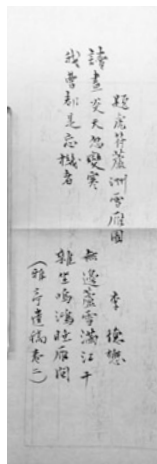
【資料3-3】メモ①¹⁴⁾

完山人	李季夏
李季夏	曾經慶南宜寧
鼎武印	三嘉郡守
世	當時五十歲前後
	三嘉今陝川也
	林尚鍾談



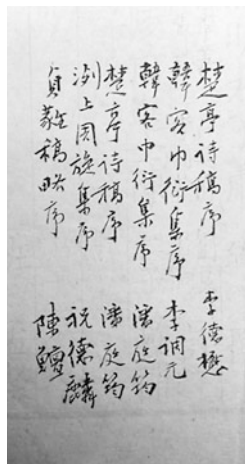
【資料3-4】メモ②





【資料3-5】メモ③

題虎符盧洲雪雁圖 李 德懋
 讀畫炎天忽變寒 無邊蘆雪滿江干
 我曹都是忘機者 雜坐鳴鴻睡雁間
 （雅亭遺稿 卷二）



【資料3-6】メモ④

楚亭詩稿序 李德懋
 韓客巾衍集序 李調元
 韓客巾衍集序 潘庭筠
 楚亭詩稿序 潘庭筠
 湧上周旋集序 祝德麟
 貞蕤稿略序 陳鱣

五、藤塚コレクション所蔵本『縞紵集』

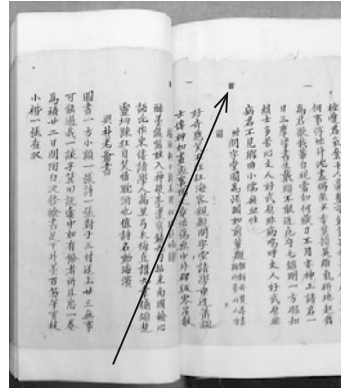
- ・『縞紵集』六卷上下の二冊 写本 蔵書印なし 帙の黄色い題簽が貼られ「縞紵集」と記される

『縞紵集』は、朴齊家の三男朴長範（1780-?）によって1809年に編纂された六卷二冊の写本である。縞紵とは、吳国の季札が鄭国の子産に縞（白絹の帯）を贈り、子産がこれに報じて紵（麻布の衣）を献じたという故事から、友人間の贈物または深い交情をいう¹⁵⁾。題名からもわかるように『縞紵集』は、朴が清朝の名士と取り交わした詩文をまとめたもので、18・19世紀の清鮮文人たちの多様な交友の姿を把握できる重要な資料である。藤塚は、朴が清朝の学者との間で往復した詩文尺牘を収めた『縞紵集』大本二冊を所蔵していると述べ、本書は「這般の消息を雄辯に物語っている」と評価している¹⁶⁾。藤塚コレクション所蔵の『縞紵集』は、帙の題簽は自筆であり、またメモが11枚差し込まれている。また朱筆の書入れがあり、■の記号をところどころ書き入れている。元の保存状態が悪かったため、間に合紙を挟めて傷みを防いでいる。

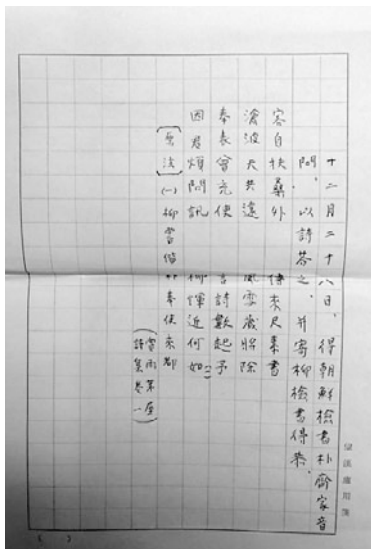
14) 林尚鍾（号は海旅）は、近代韓国の美術品収集家である。印譜集『望漢廬印賞』に林の印が見られることから、藤塚と交流があったことがわかる。『望漢廬印賞』の真ん中の上には、藤塚の名前が、その下には藤塚の号素軒の印が押されている。左には、左上から穎雲（金容鎮）、海旅（林尚鍾）、松隱（李秉直）、無號（李漢福）、素筌（孫在馨）など当時の最大の鑑職眼の印が押されてある（果川市秋史博物館所蔵、李曉辰「京城帝国大学の支那哲学講座と藤塚鄰」（『文化交渉』創刊号、関西大学東アジア文化研究科、2013年1月）を参照されたい）。

15) 『大漢和辞典』第八卷（大修館書店、昭和51年、第五刷）、1144頁。

16) 藤塚鄰『日鮮清の文化交流』、49頁。

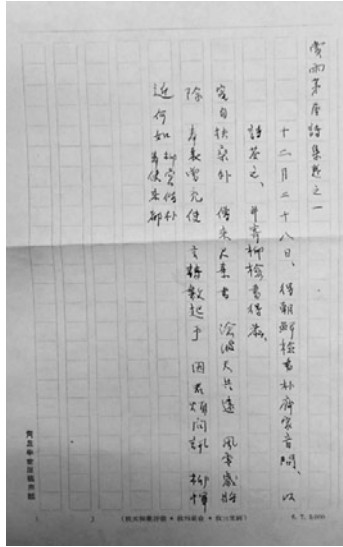


【資料4-1】藤塚コレクション蔵『縞紵集』の帙と本文（■の記号あり）



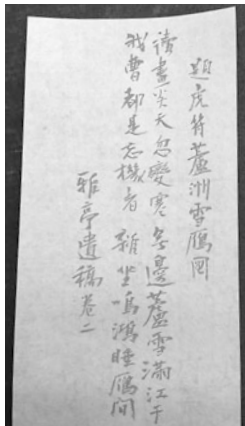
十二月二十八日、得朝鮮檢書朴齊家音
問、以詩答之、并寄柳檢書得表、
客自扶桑外、傳來尺素書
滄浪天共遠、風雪歲將除
奉表會充使、言詩數起予
因君煩問訊、柳憚近何如
(原注) (一)柳嘗偕朴奉使來都
(實雨茅庵、
詩集卷一序)

【資料4-2】メモ①



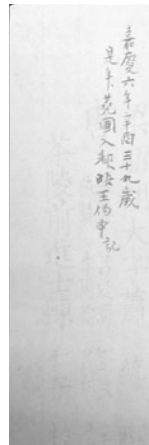
賞雨茅屋詩集卷之一
 十二月二十八日、得朝鮮極書朴齊家音問、以
 詩答之、并寄柳楷書信表、
 客自扶桑外 傳來尺素書 滄浪天共遠 風雪歲將
 除 奉表會充使 言詩數起予 因君煩問訊 柳惲
 近何如
 柳嘗偕朴
 奉使來都

【資料 4-3】×ㄗ②



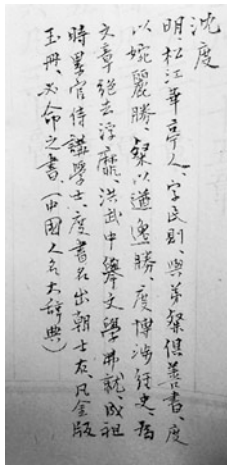
題虎符蘆洲雪鴈圖
 讀畫炎天忽變寒 無邊蘆雪滿江干
 我曹都是忘機者 雜坐鳴鴻睡鴈間
 雅亭遺稿卷二

【資料 4-4】×ㄗ③



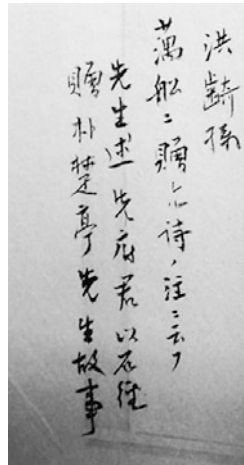
嘉慶六年辛酉三十九歲
 是年堯圃入都晤王伯申記

【資料 4-5】×ㄗ④



沈度
明、松江華亭人、字民則、與弟祭俱善書、度以婉麗勝、祭以適逸勝、度博涉經史、為文章絕去浮靡、洪武中學文學弗就、成祖時累官侍講學士、度書名出朝士右、凡金版玉冊、必命之書、(中國人名大辭典)

【資料4-6】×モ⑤¹⁷⁾



洪麟孫
滿船二贈レル詩ノ注ニ云フ
先生述 先府君 以石經
贈朴楚亭先生故事

【資料4-7】×モ⑥



不幸近之人生斯世亦復何樂
病且未健卧不能起只想披
緇入山耳聞盡室赴郡其
滿可知惟望為政自愛
姑此不備伏惟
兄照甲寅孟秋之十四第齊家
頓首

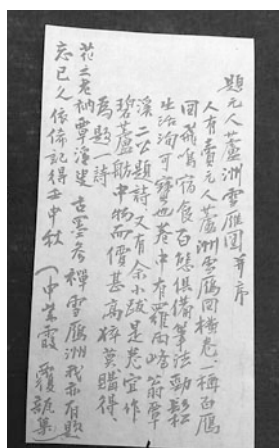
【資料4-8】×モ⑦



嘉陵郡齊回納
朴扶餘謝書
秋暑去而益烈無以排遣
忽拜
惠札穆如清風兼有離
菜不托之資不啻裹飯之
子乘也弟於日昨見七兒之
傷新悲舊恨芒々交集杜翁
所云媳為人父無食致天之句
朴齊家手簡 (但科自筆ニアラズカ)

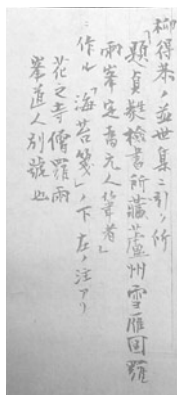
【資料4-9】×モ⑧

17) 方賓觀 (ほか) 編『中國人名大辭典』(上海: 商務印書館、1927年)を参考にしたと考えられる。



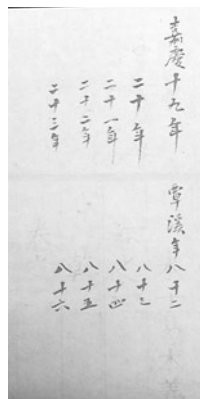
題元人蘆洲雪雁圖并序
 人有賣元人蘆洲雪雁圖橫卷、一稱百鳥
 圖飛鳴宿食百態俱備筆法勁鬆
 生活洵可寶也卷中有羅兩峰翁筆
 溪二公題詩、又有余小跋是卷宜作
 碧盧舫中物而價甚高粹莫購得、
 爲題一詩
 花之老衲罩溪叟 古墨參禪雪鴈洲 我亦有題
 忘已久 依條記得壬申秋（申紫霞 覆瓿集）

【資料 4-10】×モ⑨



柳得恭ノ並世集ニ引ク所
 「題貞蕤檢書所藏蘆洲雪雁圖羅
 兩峯定為元人筆者」
 二作ル「海苔箋」ノ下左ノ注アリ
 花之寺僧羅兩
 峯道人別号也

【資料 4-11】×モ⑩



嘉慶十九年	單溪年八十二
二十年	八十三
二十一年	八十四
二十二年	八十五
二十三年	八十六

【資料 4-12】×モ⑪

結びにかえて

本稿では、ハーバード燕京図書館の藤塚コレクション資料を、朴齊家の著作を中心に紹介した。朴は金正喜を清朝文化へ導いた人物であり、藤塚が金正喜研究を始める際の契機となった人物であった。紹介した資料からもわかるように、藤塚は朴の著述を収集する際、その後裔から入手するなど様々なルートを通じて最も信憑性が高いものを集めていた。さらに、保存状態も良く、『貞蕤閣集』のように全巻が揃っているものもあるため、これらの旧藤塚蔵書は資料としての価値も高いといえよう。また、書き入れやメモから、藤塚の研究の目的と方向を読み取ることもできる。藤塚は、詩文や尺牘に現れている情報を精密に考証し、18・19世紀に行われた朝鮮と清朝学者との学術的交流を再現しようとしたのである。

藤塚は、清朝と関係の深い学者の書物であれば、必ず所蔵しようとしたといっても過言ではないほど、情熱的に18・19世紀の朝鮮学者たちの書物を収集、分析した。書物の購入のみならず、韓国の蔵書家や美術所蔵家たちとも交流しながら情報を得た。しかし、藤塚がこのような長年にわたって集めた膨大な資料と研究は、その死後、日本や韓国、そしてアメリカに分散し、現在、藤塚がこれらの資料をどのように集め、研究に用いたのかは、その著『日鮮清の文化交流』と『清朝文化東伝の研究』の記述から断片的に推測できるととどまる。しかし、今後は果川文化院のコレクションや人脈を含め、藤塚が行った研究をより詳しく再構成していく必要があると思われる。彼が集めた資料を追っていくことだけでも、朝鮮後期の清朝文化交渉の新しい事実が発見されるであろうし、また、それらの資料を用いて、藤塚がどのように資料を入集し、読み、評価したかを考察することにより、近代における韓国儒学研究史の中で藤塚の研究が持つ意義を明らかにすることができると考えられる。